

司式 熊田雄二牧師

奏楽 森永美保姉妹

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 3:1 力の主をほめたたえまつれ

力の主をほめたたえまつれ わが心よ 今しも目さめて
たて琴かきならしつ つ 御名をほめまつれ アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

かみ 神よ、わたしを憐れんでください。おんいつく 御慈しみをもって。ふか おんあわ 深い御憐れみをもって、そむ つみ 背きの罪をぬぐい
さ 去ってください。わたしのとが をことごとくあら つみ きよ 罪から清めてください。わたしはとがのうちに産み落と
され、はは がわたしをみごもったときも、わたしは つみ のうちにあったのです。わたしをあら 洗ってください。
ゆき よりも白くなるように。かみ 神よ、わたしのうち きよ 清い心を創造し、あたらし たし 新しく確かな霊をさずけてくださ
い。すく よろこ 救いの喜びを再びわたしにあじ わせ、じゆう れい 自由の霊によってささ 支えてください。しゅ 主よ、わたしのくちびる ひら
てください。このくち は、あなたのさんび うた 賛美を歌います。

しゅ 主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、なにもの かみ 何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それにつか 仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、かみ しゅ 主の名を、みだりにとな 唱えてはならない。主は、
な もの ぼつ 名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. あんそくにち おおぼえて、これをせい 聖とせよ。
5. あなたのちち はは 父と母をうやま 敬え。
6. あなたはころ 殺してはならない。
7. あなたはかんいん 姦淫してはならない。
8. あなたはぬす 盗んではならない。
9. あなたはりんじん 隣人についてぎしょう 偽証してはならない。
10. あなたはりんじん いえ 隣人の家をむさぼってはならない。りんじん つま 隣人の妻、またすべてりんじん
のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 3:2 救いの主をほめたたえまつれ

救いの主をほめたたえまつれ 御言葉もて我が身を励まし

悩みに勝たしめたもう 御いつたぐいなし アーメン

共同の祈祷 祈祷書7 カルケドン信条(キリストの二性一人格)

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しかも罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 甲信地区伝道を覚えて 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書12章49～59節(新約聖書133頁)

説教・祈祷 「新しい出発の時」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 30:1 いとも尊き主は降りて

いとも尊き主は降りて 血の値もて民を救い

きよき住まいを造り建てて そのいしずえとなりたまえり アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63 あめつちこぞりて

あめつちこぞりて かしこみ讃えよ み恵みあふるる父・御子・御霊を アーメン

* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 門脇陽子長老(司会・受付 次週:雨宮信長老)

本日 受付 1階:大日南信也・藤井牧子執事 2階:大日南隆夫執事 / 動画: 録音:

次週 受付 1階:古澤迪子・藤原宏章執事 2階:佐藤紀子執事 / 動画: 録音:

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります

I 伝道は人々を二種類に分ける

地上に平和をもたらすはずの神の御子が、「平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない」(51節)とは、かなり厳しい言葉です。しかし、これは、今日まで事実です。天よりの主イエスと共に「天国は近づいた」と宣べ伝える時、天からの神の子キリストを受け入れる者と拒否する者に分かれます。その意味で「私が来た」のは、人々を真っ二つに分ける剣のようなものだ、と主イエスは言われます。キリストによれば、人類は究極的には二種類に分かれます。キリストに属するものかそうでないかです。

いちばんつらい分裂が、この世のしがらみのある家族です。しかし、神の家族かこの世の家族かと、キリストの言葉は妥協がありません。イエス御自身、自分のこの世の家族について、突き放すように語られたことがあります。伝道している最中に、「あ母さんと兄弟たちが来ましたよ」と告げられた時、ここに、「私の母、また兄弟姉妹がいる」、「私の母、私の兄弟とは、神の言葉を聞いて行なう人たちである」と言われました。天の父の御心は、まず神との平和を受け入れる者であり、そのために、天から神の御子をお遣わしになりました。それほど神と罪人との距離は隔たっています。

人間同士の地上の平和は、神との永遠の平和の次に意味を持つものです。人との平和が神との平和を妨げるなら、神との平和をまず第一とせよ。主イエスは本来神の子だから当然、神の家族が第一です。しかし、主イエスによって神の子とされた者にとっても、永遠に続くのは、神の家族です。

家族に理解のない場合、キリストの十字架に従うことが要求されます。家族と喧嘩しろという意味ではありません。世話をするなという意味でもありません。家族を身近な隣人として愛して、平和的に過ごすことは大事です。とくに、自分の信仰生活を尊重してくれるなら、やがて家族も神の祝福を受ける可能性があるのです。

信仰のゆえに反対、敵対、迫害される場合、この世の関係を取るか永遠の関係を取るかが迫られます。この世を取れば波風は立たないし、この世の命は守れます。永遠の命を取れば、十字架の道を歩んで永遠の希望を見い出すことになります。「キリストか先祖代々の神々か」は、偶像礼拝を迫られます。すなわち、偶像は神にふさわしくないから、偶像からは離れよ。「神か親か」を迫る親、「キリストか俺か」を迫る恋人・夫も、本人が神やキリストの位置を占めるのですから、偶像になりうるのです。

II 天からのしるし

54節 「イエスはまた群衆にも言われた。」ここまでは、おもに弟子たちに言われたことでした。しかし、56節で「偽善者よ」と言っておられるので、おもにファリサイ派・律法学者たちと思われれます。並行記事のマタイ福音書ではファリサイ派とサドカイ派が「エルサレムから」来たと言っています。ファリサイ派とサドカイ派は、ふだん仲が悪いのに

イエス暗殺計画では合意しました。しかし、群衆はイエスを預言者と思っているので、簡単には殺せません。何か言葉尻を捕らえて、律法違反を証明しないとイケないのです。ここはマタイ福音書の方にはっきり書いてあります。ファリサイ派とサドカイ派がイエスを試そうとして「天からのしるし」を求めました。預言者にせよメシアにせよ、天の神から遣わされるからです。

しかし、天気予報には敏感だが、時代のしるしには鈍感だと、イエス様は警告なさいました。時代のしるしとは、終りの時代のメシア到来のしるしです。旧約聖書の預言が「主の日」「その日」「その時」と、神の裁きと救いがなされると言っていたしるしです。メシアの登場によって伴うしるしは、もうたくさんしておられました。荒野に水が湧き出で、野原一面に命の花が咲くしるしが、病人や盲人たちになされました。イスラエル人にも異邦人にも大勢の人に癒しの奇跡がなされました。イスラエル人にも異邦人にも大勢の人に命のパンを与える奇跡もなさいました。

Ⅲ 判断停止人間

次の、早く仲直りをしなさいという教えはマタイ福音書の山上の説教にもあります。ルカ福音書では、57節が付いているのが特徴的です。「あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか。」ユダヤ教が『タルムード』という聖書の10倍くらいはある、細かいことまで律法の付け足しや解説や解釈書を作っていたので、ユダヤ教徒はトラブルがあると、すぐ、律法の専門家に判断を求めるのが習慣になっていたようです。

安息日問題がよく出てきますが、この12章の始めの方で、群衆の一人が「先生、私にも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」というのがありました。「誰が私をあなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」とイエス様が言われたように、明らかに変なお願ひですが、当時はそれが当たり前だったようです。ラビと言われる先生がタルムードを使って裁判官や調停人の役割をしていたのでしょう。

イエス様が山上の説教で教えられた時、群衆は非常に驚いたとあります。理由は、律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからです。律法学者は丹念にタルムードを調べて引用しながら教えていたのでしょう。イエス様は、そんな分厚いものはないで、まっすぐ群衆に向かって、御自分の言葉で教えられました。

「先生、私にも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」というお願ひには兄弟に「腹を立てている」ことが含まれています。そこには憎しみに満ちた心があります。憎んで腹を立てる場合、「あんな奴いなければ」「あの人さえいなければ」と心の中で叫んでいて、その人の存在がなくなることを願っています。つまり、心の中では殺しているのです。殺意は、ほんのちょっと腹を立てたことから始まることもあって、仕返しの最終段階が殺人です。それがエスカレートする前に「仲直りせよ。」律法の要求であり精神である愛は、律法学者からはどんどん離れて、イエス様によって回復されました。しかも十字架の出来事を見通して教えられています。赦された者は赦す者になれ。

教会形成において大切なことの一つは、赦しあいと仲直りです。教会は、キリストを信じることで一致する集まりです。気の合う仲間の集まりではありません。お茶のみ仲間、酒飲み仲間、趣味・娯楽仲間ではありません。人間の好き嫌いで一緒になっているのではないのです。むしろ、自分に合わない人を理解し、受け入れ、赦しあっていくことに意義

がある集まりです。それが、罪を赦してくださったキリストのなざる弟子訓練なのです。

十二弟子は、誰がいちばん偉いかと高ぶってケンカしていたことを福音書は隠しません。そこにキリストの言葉の支配と訓練が必要であったことを知ったからです。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、身を低くして仕える者になれ。私も天から低く下って仕える者の姿をとった」とキリストは言われます。今年は新しい出発の時ですが、キリストの弟子訓練は続きます。